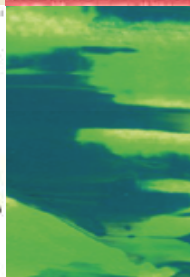
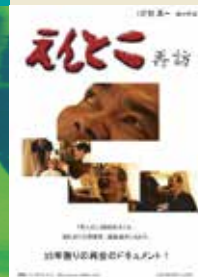
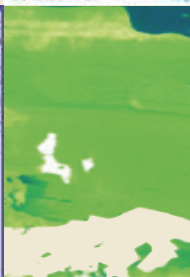


HUMAN documentary
film festival abeno



ヒューマン ドキュメンタリー映画祭 《阿倍野》2016

8月26日(金)～28日(日)

【会場】阿倍野区民センター 大ホール TEL 06-4398-9877 地下鉄谷町線「阿倍野」6番出口すぐ

感動は予想を超える!

映画祭のご案内

主催/ヒューマンDFプロジェクト

共に生きる

「みんなちがって みんないい…」

そんな思いに共感しながら、ヒューマンドキュメンタリー映画祭を大阪・阿倍野で立ち上げたのが、2002年の夏。

今年でもう14年目の開催になる映画祭は、阿倍野に根を下ろし、すっかり定着しました。

「ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》」は市民の手による映画祭です。映画好きの市民、福祉にかかわる方々、映画の作り手などが集まり、地域の多くの方々の応援により支えられてきました。

14年目の本年度は、もう一度原点に戻ってみようというのが、映画祭を担ってきたスタッフの思いです。

「ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》」の原点とは何か…。

一言で言えば、“共に生きる”という考えです。

誰もが語る言い古された言葉に聞こえるかもしれませんが、私たちの社会の永遠のテーマであるように思います。

ヒューマンドキュメンタリー映画を観ることで生まれる共感も、この一言に尽きるでしょう。

ちがった個性を持つ一人ひとりが、同じ地域、同じ時代に、お互いのちがいを認め合いながら“共に生きる”。

映画祭の場で映画を通じて、ちがいをしっかりと見つめてほしいと思います。

スクリーンに映る一人ひとりに自分自身の存在を重ね合わせて観てもらえたらと思います。

そして“共に生きる”という生き方を探るきっかけになれば、と思うのです。

人と人のよりよいかかわりを次の時代に繋いでいくための場作り。

「ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》」へのご支援、よろしくお願いします。

ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》総合プロデューサー
伊勢 真一

開催概要

いのちを描く、人を描く

《阿倍野》では当初から、「人生を深く描いた」ドキュメンタリーを届ける姿勢を貫いています。人々のひたむきに生きる姿を通して、社会の問題を静かに問いかけたり、命のきらめきをまっすぐ描いた作品を一挙上映することで、驚くほどの感動が会場から湧き起こります。東日本大震災が発生した2011年には、わずか5か月後に、宮城県を舞台にした2つの映画を上映。2015年には、「戦後70年」と真正面から向き合った作品群で話題を呼びました。今年は、「いのち」や“生きる”ことを、映画に登場する一人一人の等身大の姿から、見つめ、考えていく場にします。



- 【開催日】 2016年8月26日(金)～28日(日)
- 【場所】 阿倍野区民センター 大ホール
大阪市阿倍野区阿倍野筋4-19-118 地下鉄谷町線 阿倍野駅6番出口 徒歩1分)
- 【入場料】 1日券：当日2,500円（前売り 2,000円） / 3日通し券：5,000円
- 【入場者数】 述べ 2,700人（2015年度）
- 【公式サイト】 <http://hdff.jp>
- 【Twitter】 http://twitter.com/hdff_abeno
- 【Facebook】 <http://facebook.com/hdff.jp>
- 【主催】 ヒューマンDFプロジェクト
- 【問合せ】 ヒューマンDFプロジェクト 大阪事務局
〒540-0037 大阪市中央区内平野町2-1-2 アイエスビル4D
E-mail : info@hdff.jp / TEL : 080-6121-4803 / FAX : 06-6945-1177

上映プログラム

今年は、全国初上映が2作品、関西初上映1作品、
字幕付上映が4作品です。

「共に生きる」という原点を大切に、
ヒューマンドキュメンタリー映画という、
さまざまな人々の生き様をテーマにした作品を上映し、
映画を鑑賞することにより、
自然な形で「人権」「障がい」「共生」について考える契機になれば…

そんな思いをつないで14年になります。
2016年の上映作品も、力作が揃いました。

【 映画上映プログラム 】		
8/26 (金)	8/27 (土)	8/28 (日)
 ※それぞれ作品上映後に 監督による挨拶があります	10:00~ 全国初上映 「Start Line」 (112分) 今村 彩子 監督 字幕あり	10:00~ 「沖縄 うりずんの雨」 (148分) ジャン・ユンカーマン 監督 字幕あり
10:00~ 開 会 式 2016年コンテスト入賞作品上映	11:52~ ドキュメント・トーク 「伝えること」 (予定) 今村 彩子 監督 堀田 哲生 氏 榛葉 健 監督	14:00~
13:00~ 「天王寺おばあちゃんゾウ 春子 最後の夏」 (99分) 人見 剛史 監督	13:30~ 「“記憶”と生きる 第一部 第二部」 土井 敏邦 監督 (215分) (休憩10分あり) 字幕あり	「えんとこ」 (100分) 伊勢 真一 監督
15:20~ 全国初上映 「被ばく牛と生きる」 (104分) 松原 保 監督	17:15~ ドキュメント・トーク 「記憶と記録」 (予定) 土井 敏邦 監督 金 聖雄 監督 伊勢 真一 監督	15:40~ 関西初上映 「えんとこ再訪」 (22分) 伊勢 真一 監督
18:00~ 「大地の花咲き ~洞爺・佐々木ファーム“喜び”ですべてを繋ぐ~」 (95分) 岩崎 靖子 監督 字幕あり	18:30~ 「袴田 巖 夢の間の世の中」 (119分) 金 聖雄 監督	16:45~ コンテスト表彰式 2016年コンテスト最優秀賞受賞作品上映 閉 会 式

8月26日(金) 上映作品



「天王寺おばあちゃんゾウ

春子 最後の夏」(99分)

監督 人見 剛史

国内2番目の高齢アジアゾウ・春子は、195年、タイから大阪の天王寺動物園にやって来ました。まだ戦争の「爪あと」が残る中、当時2歳だった春子は一躍、人気者となり、以来、64年間、大阪の人々に愛され続けました。しかし、2013年、夏は炎天下の運動場に出るのを嫌がり始め、冬には、あることが原因で春子の食事を抜く事態が起きるなど、人気の陰で飼育員にとって初めての事態が相次ぎました。そして、2014年、春から夏へと季節が変わる中、春子に大きな変化が起きます。老いと闘いながら、最後の最後までお客さんの前に立ち続けた春子。天国へ旅立つ時までカメラはまわり続けました。



「被ばく牛と生きる」(104分)

監督 松原 保

福島第一原発の事故は、浜通りに暮らす多くの住民の幸せを奪った。緑豊かな放牧場で牛と共に生きてきた畜産農家の運命も狂わせた。放射能によって被曝した牛は、出荷はおろか、移動も繁殖もできないため、経済価値はゼロ。市場原理からすれば、生かす意味のない家畜となってしまった。国はそんな被ばく牛を全頭殺処分にする指示を出した。その指示に逆らい、食肉になる運命の牛であったが、意味もなく殺せないと牛を生かし続ける農家がいる。伝染病となる口蹄疫とは違い、人間に迷惑をかけないという理由もあるが、今まで牛のお蔭で生活してきたという恩義、手塩にかけ子牛から育ててきた愛情が、農家の複雑な思いとなって、生かす行動に駆り立てた。事故当初、20数件いた殺処分反対農家も、5年が経過し、わずか5軒となった。被ばく牛を使って、未知の領域である低線量被ばくの影響を確かめようとする研究者が現地でも調査するも研究の資金集めに難航する。国も公的研究機関が手を出さない被ばく牛の生きる意味を探し続ける農家と研究者の悲哀をこの映画を通して描きたい。

全国初上映



「大地の花咲き

～洞爺 佐々木ファーム"喜び"ですべてを繋ぐ～ (95分)

監督 岩崎 靖子

北海道・洞爺湖畔の佐々木ファーム。毎朝「愛と喜びを循環するぞ!」と宣言して畑に入る。野菜は自分たちの言葉を全部聴いている。「元気か?」「ありがとう」と声をかける。農薬も肥料も使わない。虫も雑草も仲間たち。その想いの裏には、大切な我が子大地君の存在があった。農場の運営で家族で意見が対立。すべてを投げ出して、この地を去ろうとしたその時、大地君は突然天国へお引越した。「僕が家族を守るからね」という言葉を残して。生きるって?命って?悲しみの中で見つけた道は、「野菜もうれしい人もうれしい 喜びの循環」で成り立たない?。虫を殺せなくなった。除草剤が使えなくなった。微生物や菌たちとすらも、一緒に農業できないか?目に映る命にひたすら「ありがとう」を言いながら農作業にあげくれた。畑は荒れ、収穫量は減り、もうだめかと思われた時。不思議な事が起きた。「味が変わったけど、肥料を変えたのか?」「野菜の持ちがいいのは、どんな保存料を使ってるんだ?」。ファームの思いを知って、支えようという人達の輪が広がっていく。ファームで生き生き働くスタッフ達の成長も含め、地球の新たな未来を模索する農家の1年を追いかけた。

8月27日(土) 上映作品



「Start Line」(112分)

監督 今村 彩子

生まれつき耳が聞こえない今村監督が、コミュニケーションの壁を乗り越えようと、沖縄→北海道日本縦断の自転車旅に出る。道に迷ったり、交通ルールにあたふたしたり、聞こえる人”との会話に四苦八苦したり…そんな彼女の姿を、叱咤激励しつつ追い続けるのは、伴走者にしてカメラ撮影を担う哲さん。2人の中には、安易な手助けや会話の通訳はしないという鉄則があった。厳しさにヘコんで、バテて、泣いて…それでもひたすら走り続ける道中、出会った人はのべ300人。温かなふれあいもあれば、会話に入れず心を閉じ黙りこむことも。そんな時、哲さんの鋭い言葉が飛ぶ。「コミュニケーションを、あなた自身が切っている!」私はどうすべきなのか…悩み苦しむ彼女に、奇跡的な出会いが待っていた。聴力にハンディキャップをもつ自転車の旅人、ウィル。カタコトの日本語で楽しそうに人々とコミュニケーションするその姿に、彼女は驚く。なぜそんなことができるの!? 満天の星の下、ウィルは言った「ビープル インサイド オナジ」最北端の地は、ゴールなのか?それとも? 人生の旅そのものの57日間3,824km。ニッポン中のためらう人に観てほしい、一篇の勇気のおすすわけです。

全国初上映



「“記憶”と生きる」(215分)

監督 土井 敏邦

元「慰安婦」たちが肩を寄せ合って暮らす韓国の「ナムム(分かち合い)の家」。1994年2月から2年にわたって日本人ジャーナリストが6人のハルモニたちの生活と声をカメラで記録した。元慰安婦」という共通の体験以外、その境遇や歩んできた道はまったく異なるハルモニたち。支えあい、時には激しくぶつかり合う。そんな生活の中で彼女たちは消せない過去の記憶と、抑えられない感情を日本人の記録者にぶつけ、吐露する。あれから20年が経った今、あのハルモニたちはもうこの世にいない。残されたのは、彼女たちの声と姿を記録した映像だった。

201年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第4位



「袴田 巖 夢の間の世の中」 119分)

監督 金 聖雄

2014年3月27日「袴田事件再審決定!」48年の拘禁生活から解放された袴田巖さん、しかしその表情に喜びは見えない、突然の釈放に戸惑っているのか、それとも拘禁症による精神へのダメージによるものなのか…。その後私たちは、東京後楽園ホール、リング上で世界“名誉チャンピオンのベルトをまき、ファイティングポーズをとる袴田巖さんにカメラを向けていた。その時の巖さんの眼光は、ボクサーだったころの鋭さをとりもどしているようにみえた、しかし…。「袴田事件は終わった、冤罪もない、死刑制度も廃止した…」そう語る巖さん。拘禁による妄想は今も尚つづいている。一方で巖さんの気持ちが解きほぐされていると感じる時がある。ある時から将棋三昧の日々が続いた。私も、何度となく挑戦したが、73戦全敗。そのたびに、ニヤッと笑顔をみせるようになった。親戚の赤ちゃんを抱いて、好々爺の表情。大好きなボクシングの話題になれば、半世紀前の記憶がよみがえり、試合の論評もする。「妄想の世界」を、日常という「現実の世界」がゆっくりと包み込んでいく。平凡であたり前のことが、本当は誰にとっても特別なことなのかもしれない。映画は、袴田巖さんの命の再生を見つめ、生きることの尊さを静かに問いかける。

第4回日隈一雄情報流通促進賞大賞

8月28日(日) 上映作品



「沖縄 うりずんの雨」(148分)

監督 ジャン・ユンカーマン

「老人と海」で与那国島の荒々しくも美しい自然と風土を捉え、「映画日本国憲法」で平和憲法の意義を訴えた、アメリカ人映画監督 ジャン・ユンカーマンが真の平和を求め、不屈の戦いを続けている沖縄の人々の尊厳を描いた渾身のドキュメンタリー。

1945年4月1日、アメリカ軍が沖縄本島に上陸。6月23日(現在の慰霊の日)まで12週間に及んだ沖縄地上戦では4人に一人の住民が亡くなった。当時、同じ戦場で向き合った元米兵、元日本兵、そして沖縄住民に取材を重ね、米国立公文書館所蔵の米軍による記録映像を交えて、沖縄戦の実情に迫る。また、戦後のアメリカ占領期から今日に至るまで、米軍基地をめぐる負担を日米双方から押し付けられてきた、沖縄の差別と抑圧の歴史を描き、現在の辺野古への基地移設問題に繋がる、沖縄の人たちの深い失望と怒りの根を浮かび上がらせる。

2015年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位



「えんとこ」(100分)

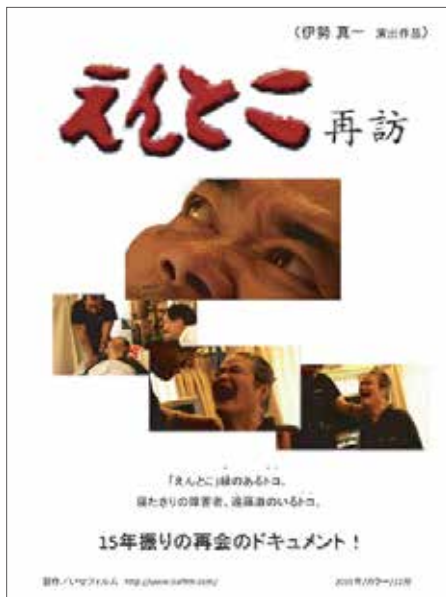
監督 伊勢 真一

「えんとこ」は、縁のあるとこ。脳性マヒで寝たきりの障がい者、遠藤滋のいるところ。遠藤は寝たきりの生活を10年近く続けており、不自由な体を引き受けながら、自立したいという強い意志を持ち、介助の若者達の力を借りて1日1日を丁寧に生きている。監督は25年ぶりに再会した友人遠藤の姿に心を動かされ「えんとこ」に通い始め、カメラを回し、日常のあれこれを記録する。1日24時間3交代で遠藤を介護する若者たちは、彼と関わることで実に生き生きとした表情を垣間見せる。そして、遠藤から多くのことを学びとっていく。「えんとこ」は遠藤滋というたくいまれなる教育者を中心にした学校のようなものだ…今では1000人を超える若者たちが「えんとこ」という学校を卒業していった。この映画は、遠藤滋と介助の若者たちとの「命を生きし合う関係」日々の暮らしを3年間にわたって記録したドキュメンタリーである。

1999年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第8位

1999年度日本映画ペンクラブドキュメンタリー部門第4位

1999年度朝日新聞社今年の日本映画5本入選



「えんとこ再訪」(22分)

監督 伊勢 真一

1999年に製作された映画『えんとこ』の主人公 遠藤滋を、15年ぶりに旧友の伊勢真一監督がカメラと共に再訪するドキュメンタリー。

脳性麻痺に加えて老化が進み、口から食べることが困難になりながらも寝たきりの自立生活を続ける遠藤滋。「ありのままの命にカンパイ!」障がいをかかえながら、たくましく暮らす姿を追った、15年前の映像をまじえて描いた短編映像である。

映画『えんとこ』の続編であり「3.11」をベッドの上で正面から受けとめた遠藤のメッセージが熱く語られる。

関西では初上映である。

関西初上映

8月27日(土)

ドキュメント・トーク

上映作品の監督や主人公が繰り広げるトークライブ。作品に秘めた思いやエピソードも交え、白熱したトークが繰り広げられる、当映画祭の名物トークライブ。

作中の細やかなニュアンスや撮影の裏話から、社会をみつめる新たな視点や切り口の発見など、会場に新たな気づきや理解を創造します。



8月26日(金)

ヒューマンドキュメンタリーコンテスト2016 入賞作品上映



全国各地から毎年、多数の作品が応募されるコンテスト。

プロ・アマを問わず、ドキュメンタリー文化を育むことを目的に開催を続けた今では、当コンテスト出身の映像作家も誕生しています。

昨年グランプリを獲った短編が今年長編ドキュメンタリーとして本上映するなど、《阿倍野》がドキュメンタリストの発表の場として広がっています。

会場の様子

映画祭会場へは、毎年ドキュメンタリー映画ファンが全国から集まります。
エントランスでは、上映作品の監督と観客があちらこちらで会話を弾ませています。



2015年度 パンフレット・チラシ・幟・チケット



スタッフ

総合プロデューサー

伊勢 真一 (ドキュメンタリー映画監督)



1949年東京生まれ。『奈緒ちゃん』『えんとこ』から『風のかたち』『大丈夫。』などまで、長年にわたりヒューマンドキュメンタリー映画を中心に製作。様々な人の日常を温かい眼差しでほのぼのと映し出す作風で知られる。近作は『傍(かたわら)～3月11日からの旅～』(2012)、『小屋番 潤沢ヒュッテの四季』(2013)、『シバ 縄文犬のゆめ』(2013)、『妻の病-レビー小体型認知症-』(2014)など。

2013年「日本映画ペンクラブ功労賞」受賞。翌年2014年には「シネマ夢倶楽部賞」を受賞。

大阪事務局長：池本 ^{ひろこ} 訓己 (クリエイティブ・デザイナー)

ディレクター：榛葉 ^{しば たけし} 健 (毎日放送、ドキュメンタリー映画監督)

運営スタッフ：ドキュメンタリー映画監督、映画ファン、クリエイター
自治体関係者、ほか多数

問合せ・連絡先

ヒューマンDFプロジェクト

大阪事務局 / 〒540-0037 大阪府中央区内平野町2-1-2 アイエスビル4D

TEL : 080-6180-1542 FAX : 06-6945-1177

東京事務局 / 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-3-7 青山N-ブリックビル3階 (いせフィルム内)

TEL : 03-3406-9455 FAX : 03-3406-9460

<http://www.hdff.jp> E-mail : info@hdff.jp  [hdff_abeno](https://twitter.com/hdff_abeno)  [hdff.jp](https://www.facebook.com/hdff.jp)

※E-Mailでの情報提供をご希望の方は、上記アドレスまでその旨を送信してください。

「命のきらめき、希望を、ひとりひとりに届けたい」

全国から映画ファンが集う、
今年で14回目の開催となる大阪・阿倍野区生まれの映画祭。
みなさまの心に感動をもたらし、
生きることの素晴らしさを映画を通じてあじわっていただこうと、
スタッフは日々奮闘しています。
社会と向き合う高品質なイベントを今後も続けるために、
皆様のお力をぜひお貸し下さい。
どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》
スタッフ一同



ヒューマンドキュメンタリー映画祭《阿倍野》2015にお越しいただいた お客様の声の一部です。

すばらしいラインナップで、今回初めて3日間通して日程調整し、最優先スケジュールとしました。

予想をはるかに超えて、この流れで観るからこそその平和、人の生活、継ぐもの、人の背負うものを感じさせられました。争いの結果の怖さも伝わり、その答えとして違うことを受け入れて理解しようと共にある姿も観せていただきました。

衝撃を受け続けた2日目の4作でした。このドキュメンタリー映画祭に来なければ観ることのできなかった作品、知ることのできなかった事実には圧倒されました。各監督の伝えたい思いがしっかり伝わりました。

あまたある映画の中から見るべき作品をピックアップしてもらえる映画祭に感謝しています。いろいろな作品を拝見し、自分を見つめ直し、自分の生き方や人との関わりについて考えることができる良い機会を与えていただいていると感じます。ありがとうございます。来年も楽しみにしています。

初めての参加です。本当に伝えたい事、伝えなければいけない事は何なのか。それぞれの映画監督の熱い思いが感じられ感動しました。

充実の10乗の2日間でした。すべての作品ひとつひとつの内容が濃くて、明日から思い出しながらかみしめたいと思います。拝見した作品すべてに共通して感じることは、一人一人の生き様ってまったく固有のもので自身の意志ではどうにもならない出自、時代の状況に左右され、それでも自己を生きていく人々を、製作する方々が個人の目線で対話しているので、自分自身が直接対話しているように思えました。もっともっと見ていたい2日間をありがとうございました。

毎年、この映画祭を楽しみにしています。今年も学び、考えさせられる作品が多く、見ごたえがありました。コンテスト入賞作品も甲乙つけがたい作品ばかりでした。

ここ5年、毎年このドキュメンタリー映画祭に参加させていただいております。いつも決まった席に着いて、作品一つ一つに目を向けております。現実から眸をそむけないための漢方薬とでもいうべく、ジワジワ身にしみてくる粒ぞろいの良い作品に出会い、感謝。理屈ばかりで疲弊する世に、理屈では語れない一瞬の本物に出会えるとき。これからもどうぞ発信し続けることを諦めないで欲しいと願うばかりです。

ドキュメンタリー映画って、自分の考え方を確認できるように思います。自分も含めて全てのものに対する接し方を再考する機会になりました。ありがとうございました。来年の映画祭の案内を送っていただけたらうれしいです。

今年もすばらしい感動をいただきました。このような映画は他では絶対に見ることはできません。今から次回も是非来たい。今度は友達を一杯連れて来よう期待です。

初めて映画祭を知りました!! 仕事で最終の2本しか観れませんでした。これから観ていきたいです!! こういう素晴らしい映画祭があるなんて感動!! リアルに人間ドキュメンタリーですね!!